

一陣の風と花の香り

「一陣の風が通り過ぎた後に、花の香りを残してゆくような、そんな男に出会ってみたい」

「勝った負けた」、「キッタハッタ」とこの世の中あまりにもごたごたしたことが多いすぎる。

そして人はあまりにも他人の立場を考えずに己れの権利主張、利益追求に走りすぎている。

ドフトエフスキーの名作といわれる「罪と罰」を読むと、頭のきれる大学生ラスコールニコフが「選ばれたる強者」というものは凡人の為に作られた法を踏みこえる権利がある」という論理をうちたて、それによって、ただ、金を持っているだけで何のとりえもない老婆を殺してしまうことが許されるのだというくだりからストーリーが展開される。

ゆきさき短かい老婆が金をためこんでいて何になるか。それより己れのよつに有能な青年がそれを使ってこそ金が生かされるというものだということである。

実際、法は、金貸しはそれがいかにあくどい者であって汚ない金であっても、これを債権者として保護するし、金を借りた人が例えば子の命を助けるために借りたとしても、一介の債務者として扱い、その為に借金が返せなければ、住んでいる土地、家からもようしやなく追い払うことにさえ加担する。

ここにおいて「花の香り」をみつけたすことはいかにしても困難である。



冒頭の句において「出合ってみたい」というのは、本来は「そういう人になってみたい」ということであるが、いささかに実現の難きと多少のへりくだりで表現しているのである。

「そんな人」とせずに「そんな男」とあるのはやはり女には「一陣の風」は似合わないからである。

「一陣の風」というからには、世の中に生きてゆくためには、やまれず力を行使する場合もあること（男の世界）を想定している。

女はただ、すれ違いざまに、ほんのりと花の香りを残してゆくことさえ出来れば上出来である（女どししの争いなどというものは、なんとしてもみにくいだけである）

それでは、いかようにして争いのあとにも花の香りを残してゆくようなことが出来るのか。

その心……。

“白鳥は悲しからずや空の青、海の青にもそまらずただよふ”

歌の意味は知らない。

ただいかにも青々とした海と空の中に一羽の白鳥がゆうゆうと浮んでいる様を思い浮かべていただきたい。

そう、いかにもゆうゆうと白鳥が大海をただよっているのである。

しかし実際、人の目にふれぬ海面下においてはおそらく足の水かきはせわしく動いている。

が、これを詠んだのでは歌にもならない。

白鳥の歌における隠されたる水かき、争いの人の世における武士（もののふ）の心、それがいかにして「花の香り」につながるのか……。

「諸君／男を磨く前にくつをみがけ」

言いて妙なる昔大学の構内でみかけたあの立看がなつかしい。